

「セクシュアリティと人間関係」のためのカリキュラム案の検討 — NCFR の提案 (1993) の場合 —

山 田 綾
(家政学教室)

A Suggested Curriculum for "Sexuality and Interpersonal Relationships"
by The National Council on Family Relations(1993)

Aya YAMADA
(Department of Home Economics)

はじめに

学校での学習が形骸化し、子どもたちが学ぶ意味を実感できず、知的好奇心を衰退してきていることが問題とされている。

学校には、「学習の最適化」を実現する知の受け伝えの独自のスタイルが存在し、その中で子どもたちは「組み立てられ、完結した知識はとりつくしまがない」と感じてしまうのである¹⁾。日常知の世界が変化しつつある今日、学校の中で子どもたちが自分とかわりのあるものとして「知」をとらえることができるように、子どもたちの生活領域を視野に入れて、学校知を学ぶ主体を要求し、学ぶ意味を実感するものに組み替えていくことが必要である。

その一つの道として、中西新太郎は、自己と他者のつながり方にかんする吟味を「かわりの主題」と呼び、これらについての学びを学校空間のなかにつくりだし、そのことにより「学習の最適化」という学校における知の受け伝えのシステムを転換していく必要を指摘する²⁾。これまでも、家族やセクシュアリティなどの生活領域において直面する問題について、教科や総合学習において一部取り組まれてきた³⁾。2002年から「総合的な学習の時間」が設置されるが、このような時間を積極的に活用し、「かわりの主題」を組み入れ、学校知の組み替えを試みていくことが必要であろう。

アメリカ合州国では、このような問題意識と重なる視点で、1970年代から子どもたちや若者の現実と問題に取り組むコースが学校カリキュラムに組み込まれてきた。The National Council on Family Relations(全米家族関係研究協議会、以下 NCFR と略す)が、1993年に発刊した『家族生活教育のためのカリキュラム・ガイドライン』(*Family Life Education Curriculum Guidelines*)⁴⁾の中には、Sol Gordonにより、幼稚園から高校生までのためのカリキュラム案として「人間発達とセクシュアリティ」と「人間関係」に関する概念のアウトラインが提案されている⁵⁾。本稿では、「かわりの主題」についての学びを考察するための一つの手段として、この提案を検討したい。

NCFRは、家族や家族と関わるテーマの学習が(学校外を含めて)どこでどのように行われているのか、その現実を把握するために、それを「家族生活教育」(family life education)と呼び、総括する取り組みを行ってきた機関である⁶⁾。

なお、1980年代に行われた「家族生活教育」に関する全米調査報告書には、1970年代に「性と愛」をテーマとする教育実践が増加し、「性」を視野に入れざるをえなくなったこと、またそのために性教育と家族生活教育の相違が議論されたことや、「性」を視野に入れることに対する抵抗があったことなどが指摘されていることを付け加えておきたい⁷⁾。

1. NCFR の「家族生活教育のためのカリキュラム・ガイドライン」(1993)

—「人間発達とセクシュアリティ」と「人間関係」の「鍵となる概念」を中心に—

1993年に、NCFR は、Dawn C. Cassidy を編者として、『家族生活教育のためのカリキュラム・ガイドライン』を発刊しているが、この冊子は以下の5つからなっている。

- Margaret Arcus, *The Nature of Family Life Education*, pp.1-3.
- *Guidelines for Family Life Education Programs over the Life Span*, pp.1-18.
- *College and University Curriculum Guidelines*, pp.1-4.
- Sol Gordon, *A suggested Curriculum for the Human Development & Sexuality and Interpersonal Relation units of the National Council on Family Relations' Curriculum Guidelines*, pp.1-4.
- *Family Life Education Reference and Resource Listing*, pp.1-5.

まず、M. Arcus により、冊子全体の趣旨として、家族生活教育の意義や目的、内容の枠組みなどについての概要が示されている。

次に、「一生を通しての家族生活教育プログラムのためのガイドライン」(以下、ガイドラインと略す)が示されている。ここでは、家族生活教育プログラムの枠組みとともに、プログラムを構成する7つのトピックスごとに「鍵となる概念」(key concepts)が明らかにされ、「子ども」・「若者」・「成人」別に示されている。

これに続いて、高等教育のためのカリキュラム・ガイドラインとともに、Sol Gordonにより初等・中等の家族生活教育プログラムへと具体化するためのアウトラインが提案されている。

Gordonは、ガイドラインの7つのトピックスの中から、「人間発達とセクシュアリティ」と「人間関係」を取り上げ、両者のトピックスに関する概念を幼稚園児から高校生のために具体化しているのである。本稿の目的はGordonの提案を検討することにあるが、その前に、前提となっているガイドラインについて若干の検討を行っておきたい。

NCFRは、1984年に、家族生活教育者の資格検定に関する報告書を準備したが、その際、その一部として家族生活教育プログラムのための枠組み(“Framework for Life-Span Family Life Education”)を発表した⁸⁾。その後、M. Arcusらを中心に1980年代後半から、家族生活教育のための概念的枠組みの整理と検討が進められ、1993年にこの冊子が作成されたのである。この冊子の最初の論文がArcusによって執筆されることからわかるように、ガイドラインに示されている枠組みはArcusらが中心になって研究してきた成果であると考えられる⁹⁾。

既に述べたように、ガイドラインには、内容領域を構成する7つのトピックスが設定され、各トピックスごとに「鍵となる概念」が示されている。Arcusは、上述の論文の中で、7つのトピックスは家族のプロセスの鍵となる3つ…コミュニケーション、意思決定、問題解決…とともに家族生活教育の内容を構成し、両者は相互に関連し、また各トピックスも相互に関連し、学習単元を構成するものであり、1984年に開発されたと述べている。

7つのトピックスは、以下の通りである。

- ・人間発達とセクシュアリティ
- ・人間関係
- ・家族の相互作用
- ・家族資源の管理
- ・親になることに関する教育
- ・倫理
- ・家族と社会

各トピックスには、2から5の主要なカテゴリーが示されている。例えば、「人間発達とセクシュアリティ」の場合は、3つの主要なカテゴリーとして、(1)成長と発達のディメンジョン、(2)健康の課題、(3)セクシュア

リティに関わるコミュニケーションが挙げられている。また、「人間関係」の場合は、(1)個人のアイデンティティと人間としての力量、(2)関わり主題と社会的なスキル、(3)個々のコミットメントと個人的な関係、の3つのカテゴリーである。

さらに、各トピックスごとに「鍵となる概念」が示されているわけであるが、このようなトピックによる分類や「鍵となる概念」の設定は、家族生活をミクロとマクロの両方の視点から理解するための学習テーマあるいは教材(subject matter)の明確化に役立ち、家族生活教育を担当する教師に要求されることを明らかにするであろうとガイドラインの序文に記されている。また、「鍵となる概念」は、「内容の範囲において重要である考えを示す」ものであると規定されている。

ここでは、Gordonにより、幼稚園から高校生のためのカリキュラム案として具体化された「人間発達とセクシュアリティ」と「人間関係」の2つのトピックスの「鍵となる概念」を表1と表2にそれぞれ示すにとどめ、ガイドラインに関して、その全容や作成経過についての詳述や検討を行わないが、以下の2つの点を指摘しておきたい。

第1に、概念的枠組みを設定することに関してである。これは、1960年代に取り組みされた学問と教科内容の構造化のための「概念アプローチ」とは異なるものと考えられる。そもそも、家族生活教育は、背景学問領域が学際的であるという特徴から、あらゆる場・時間・対象者に行われている家族に関する教育を統括するためにつくられた概念であり、ある学問を基盤に内容の枠組みを構成して捉えないところに特徴があったわけである。しかし、1960年代から定義の明確化が要求され、定義する試みが始まり¹⁰⁾、さらに1980年代のアカデミック教科を重視する学校教育改革や、家族研究の深まりと広まりの影響、教員資格を明確にする必要などとの関連で概念的枠組みが設定されるに至ったと考えられる。従って、枠組みは、ある学問の構造から導き出されるのではなく、生活の現実と実践の事実から考察されたものであり、枠組みにより実践が制限されたり、実践を硬直させるものではないと考えられている¹¹⁾。

第2に、「セクシュアリティ」が家族生活教育のトピックスの一つに位置づけられている点である。「セクシュアリティ」の視点の導入については1970-1980年代には抵抗があったことが示されているが、第1の点とも関わり、生活の現実とその実践から検討した結果、その視点が導入されたと考えられる。「人間発達とセクシュアリティ」の設定は「家族生活」という枠に広がり深まりをもたらし、「家族」や「人間関係」を根源的に問う一つの可能性をもたらすであろう。

表1 「人間の発達とセクシュアリティ」における「鍵となる概念」

発達段階	鍵となる概念
子ども	<ul style="list-style-type: none"> ・身体的, 情緒的, 社会的, 性的な発達 ・個々人の発達における類似性と相違 ・年上の人 (青年, 成人, 高齢者)**についての理解 ・特別な要求を持つ人々を理解する。 ・各人の個性 ・健康 (栄養, 身体の衛生) を保つ責任 ・成長と発達に影響する社会的, 環境的なコンディション ・人間の再生産の局面 (胎児の発達, 誕生, 思春期)
若者	<ul style="list-style-type: none"> ・発達のタイプ…身体的, 認知的, 情緒的, 人格的, 道徳的, 社会的, 性的 ・ライフ・スパンを通じた発達のパターン (死に対する観念) ・発達のタイプの間の相互作用 (例えば, 社会的発達と性的発達) ・発達における個人差を受け入れる ・成人期と高齢期のステレオタイプと現実 ・発達上の障害 ・成長と発達に影響を及ぼす社会的, 環境的コンディション ・身体的健康と発達上の化学的薬物の影響 ・身体上の健康 (栄養, 衛生, 運動) のための責任 ・身体のプライバシーと性的虐待に対する防御 ・セクシュアリティについてのコミュニケーション (個人的な価値, 信念) ・ノーマルな性的感覚や性的応答 ・人間の再生産と受胎調整 ・変化する家族とセクシュアリティについての社会的な信念 ・性的な振る舞いの選択, 結果, 責任
成人	<ul style="list-style-type: none"> ・発達の範囲…身体的, 認知的, 情緒的, 道徳的, 人格的, 社会的, 性的 ・ライフ・スパンを通じた発達のパターン (死に対する観念) ・発達のタイプの間の相互作用 (例えば, 社会的発達と性的発達) ・発達における個人差に影響する要因 ・自己と他者の発達を引き出す ・成人期と高齢期の神話と現実 ・障害に対処する ・成長と発達に影響を及ぼす社会的, 環境的コンディション ・個人と家族の健康に対する責任 ・セクシュアリティについてのコミュニケーション (個人的な価値, 信念, 意思決定を分かち合う) ・ノーマルな性的感覚 ・人間らしい性的応答 ・受胎調節, 不妊症, 遺伝学 ・責任ある性的な振る舞い (選択, 結果, 意思決定を分かち合う) ・性的虐待の防止 ・変化するセクシュアリティについての社会的な信念

**この表においては, () 内の用語は例であって, 包括的な内容ではない。

GUIDELINES FOR FAMILY LIFE EDUCATION PROGRAMS OVER THE LIFE SPAN, pp.3-4 (Dawn C. Cassidy ed., *Family Life Education Curriculum Guidelines*, The National Council on Family Relations, 1993) より筆者作成。

表2 「人間関係」における「鍵となる概念」

発達段階	鍵となる概念
子ども	<ul style="list-style-type: none"> ・自尊感情をつくる ・個人の強さを確認し，豊かにする ・自己と他者を尊敬する ・感情を扱う ・他者とコミュニケーションする ・建設的に感情を分かち合う ・他者から学び，他者に教える ・友情をはぐくみ，保ち，終わらせる ・時間，友人，友情，所有物を分かち合う ・他者とともに問題を処理する ・自己と他者に対して考慮する
若者	<ul style="list-style-type: none"> ・自尊感情と自信をつくる ・個人の能力と才能を査定し，開発する ・自己と他者を尊敬する ・人の考え，態度，価値観を変化させ，発展させる ・感情を扱う ・成功と失敗に対処する ・情報，考えたこと，感じたことをコミュニケーションする ・関係を始め，維持し，終わりにする ・人間の相互関係における適合性を査定する ・関係性について自分で感知し結果を理解する ・デートの欲求と動機を理解する ・行為に対する責任を取る ・自分自身の興味と他者が最も関心を示していることに行動する ・家族の生活スタイルを選択するための基盤を理解する（価値感，遺産，宗教の信仰）** ・仲間選別に影響する要因（社会的，文化的，個人的要因） ・愛と誓約・婚約の次元を理解する ・結婚の責任を探究する
成人	<ul style="list-style-type: none"> ・自分にも他者にも自己尊重と自信をつくる ・個人として自立する ・建設的に個人の変化を遂げる ・効果的にコミュニケーションする ・感情を扱う ・危機に対処する ・親密な関係を練習する ・関係をつくりだし，維持し，終わらせる ・関係性について自分で関知した結果を理解する ・役割と関係性への影響を変える（民族的，人種的，社会的影響） ・関係性の質に関わる要因を認識する ・責任をとる，誓約する，婚約する ・関係性における選択を評価する ・時がたつにつれて生じる，結婚関係における変化 ・自分自身の家族を創出し，維持する

**この表においては，（ ）内の用語は例であって，包括的な内容ではない。

GUIDELINES FOR FAMILY LIFE EDUCATION PROGRAMS OVER THE LIFE SPAN, pp.5-6 (Dawn C. Cassidy ed., Family Life Education Curriculum Guidelines, The National Council on Family Relations, 1993) より筆者作成。

2. 初等・中等の家族生活教育のためのカリキュラム案

—「人間発達とセクシュアリティ」と「人間関係」のアウトライン—

Gordon は、既に述べたように、初等・中等教育の家族生活教育プログラムのために、ガイドラインに提示されたトピックスと「鍵となる概念」の具体化を試みた。Gordon の提案は、表3に示すとおりである。

表1・2からわかるように、ガイドラインの「鍵となる概念」は抽象的な記述である。表3をみると、Gordon は「鍵となる概念」を子どもたちの現実、直面する課題、教育の視点から具体化したと考えられる。

その際、まず注目すべき点は、7つのトピックスの中から「人間発達とセクシュアリティ」と「人間関係」とが取り出され、「鍵となる概念」が具体化されたことである。Gordon は、この提案の冒頭で、自己尊重と他者への関心とともに、セクシャルなディメンジョンに強調点を置いたことを述べている。

従って、Gordon の提案の特徴は、第1に、「人間発達とセクシュアリティ」と「人間関係」の具体化を提言した点にある。その理由は明記されていないが、子どもたちが生活領域で直面している問題はまさに愛と性、それと関わるボディ・ポリテックス、家族問題を中心とする依存関係や暴力的な上下関係である。それは言いかえると、近代家族の現実を探求するためには人間の関係性に注目せざるをえず、その際セクシュアリティを省いて考えることはできないということでもある。それ故、Gordon は、ステディになる、セックスをする、性的虐待など、子どもたちの現実生活とそこに想起する問題に即した内容を取り上げている。

実際、1990年代に行われたハイスクールの家族関係コースの内容調査によると、ハイスクールでは「人間発達とセクシュアリティ」と「人間関係」の2つのトピックスに関連するテーマが最も多く取り上げられていたことが報告されている¹²⁾。

但し、これらを中心に教育を展開する際に、近代の性の過剰をそのまま肯定することにならない視点、相対化する視点、言説批評のアプローチが組み込まれる必要がある。その点はどうなっているのだろうか。

この点と関わって、第2の特徴として、近代家族や近代的な性のあり方を相対化したり、言説を批評する視点が組み込まれている点が挙げられる。提案には、家族を重視する、あるいは若者が直面している性の問題…例えば早すぎる妊娠やエイズなどの性感染症…を克服するために無防備なセックスを否定するなどの前提が垣間見られるものの、一方で、家族を相対化する視点や、家族や性に関する規範を教え込むのではなく子どもたちが家族、セクシュアリティ、セックスについて慎重に考える手だてが組み込まれている。

その一つとして、例えば、K-3 学年の6では、一般

には結婚するものとしながら、結婚しなかったり、子どもをつくらない暮らしもあること、それも認めるべきであることが示されている。10-12学年では、17にみられるように、性の多様性も位置づけられている。

また、愛とセックスの関係が具体的に繰り返し検討され、それに関わる神話の解体(例えば、マスターベーションの神話)に取り組むことが提案されている。

第3の特徴として、第2の特徴と関わって、現実をとらえる重要な視点(批評の視点)として、具体的には男女平等や女をはじめとするマイノリティの視点が書き込まれ、学習主体の分化と他者性の理解、偏見と差別の問題が提案されている点が挙げられる。

これらの視点は、例えば、4-6 学年の1に明示されている。注目しておきたいことは、それに先立ち、性別分離型の成長過程と社会の現実をふまえ、K-3 学年でまずは女性と男性、女の子と男の子の違いについて、子どもたち自身が考えることが提起されている点である。それをふまえて、男女をはじめとする、人間の「公正」について検討されるようになっていく。

但し、ここには、課題もある。確かに、同性愛の記述など性の多様性の視点が組み込まれているものの、女の子と男の子、女性と男性の相違を特に生物学的性差の次元で当然視させてしまうような視点がみられるからである。1990年代に入り、性別に過剰に意味づけられてきたことがらが問題とされ、一方でトランス・セクシュアル、トランス・ジェンダー、半陰陽の人々の存在が顕在化し、生物学的性差自体の曖昧さもまた実感されるに至っており、そのことをどのように教育において引き受けるかは課題である。

第5の特徴として、第2に述べた手だてと関わって、現実社会において論争テーマとなっている社会的な問題を取り上げ、子どもたち自身が議論するようになっていく点が挙げられる。この点に関しても、Gordon は冒頭で、「論争となっている課題をあらゆる局面から取り込んだ」と述べている。

例えば、近親相姦、売春、レイプ…などが取り上げられ、それらについての議論は10-12学年で積極的に設定されている。特に、子どもたちが現実に関わるテーマを議論する際に、「中絶」(第10-12学年の16)のところで述べられているように、それがいけないことであるという決めつけを一旦取り除き、公平な態度で、考えられるあらゆる局面から検討する、という姿勢が必要であるとの指摘は重要である。また、セクシュアリティ問題を考える際に、社会の規範や親の期待とともに、ポップ・カルチャーやピア・プレッシャー、広告、メディアが取り上げられている。このように、子どもたち自身が自分の周りのポップカルチャーや広告などを批評したり、その影響を考えたりすることは重要である。

第6の特徴として、性的虐待の問題については、子

表3 初等・中等の家族生活教育のためのカリキュラム案
 「人間発達とセクシュアリティ」と「人間関係」のアウトライン

学 年	トピックスと概念のアウトライン
K-3 学年 (初等)	<ol style="list-style-type: none"> 誰もが、家族の一員である。 どの家族も同じではない。 全ての者は、男か女である。 男の子と女の子は、異なる。どこが主に違っているのか？ 成人男性と成人女性の主要な相違点は、どこにあるのか？ 男の子と女の子、男性と女性は、相違点よりも類似点の方が多い。両性は、楽しみ、友達になる。両性とも、健康に成長し、教育を受け、つきたい仕事につくことを望む。多くの人は、愛する誰かと結婚し、彼ら自身の家族をつくり始める。中には、結婚したり、子どもをもったりすることを望まない人もいるが、それもまたよいのである。 どのように赤ちゃんは生まれるのか？ 人間、下等動物、植物は、どのように再生産するのか？ 動物と人間の再生産は、どこが違うのか？ 身体の主要な部分の正しい用語：例えば、胎児は、胃の中ではなく、子宮の中で成長する。 妊娠期間中には、成長するプロセスがあることを理解する。 子どもが成長するための親の役割と重要性。 他の人々とうまくやっていく。 人間の体が成長するには、愛、時間、世話が必要である。 あらゆる性的な行為は、プライベートになされるべきである。 あなた以外の何者も、あなたの性器に触れ、愛撫するべきではない—たとえあなたが知っている誰かでも。もし、誰かが、触れようとしたり、触れたがったら、「だめだ」と言いなさい。そして直ぐに、お母さんか、お父さんか、あなたが信頼する誰かにそのことを話さない。(子どもたちがそのようにすることは容易ではないが、子ども達はそのようなことが自分の身に起こったとしても、それは自分の失敗ではないということを知る必要がある。)
4-6 学年 (中学年)	<ol style="list-style-type: none"> 男の子と女の子は、成長のための平等な機会を必要とする。私たちは、障害をもつ人々、あるいは、一般的ではない人々、宗教、人種、文化、民族、経済的な状況において、私たちと異なる人々を受け入れ、評価することが必要である。偏見、差別、セクシズムは不正であり、民主主義の伝統に反する。 遺伝。姉妹や兄弟は、互いに違っている。二卵性双生児も、互いに違っている。 成長に影響を及ぼすホルモン。思春期。 月経の開始。 夜の射精 (夢精)。 マスターベーションに関する神話を追い散らす。 道徳的、倫理的な価値と一致するような、責任のある社会的行為の重要性を理解する。 私たちの主たる価値は、家族生活からくる。学校は、子どもたちや若い人たちの決定に際して助けとなるような補足的な事実や考えを提供する。 家族生活は、変化しうるものであり、喜びや悲しみ、時にはその両方をもたらすことがある。たとえば、赤ちゃんの誕生、新しい家への引っ越し、結婚の崩壊、深刻な病気、死、失業、貧困。 身体が変化する度合いや時期には、個人差があることに気づく。 エイズを含めた性感染症について学習する。 性的虐待を防ぐ方法--「正しい」タッチと「間違った」タッチを理解する。(「良いと悪い」は子ども達を混乱させる概念であるので、「良いと悪い」ではなく「正しい」と「間違った」がよい。)
7-9 学年 (ジュニア ・ハイス クール)	<ol style="list-style-type: none"> 第二次性徴期の性別による特徴と発達の違いは異なっていること。 男の子——身体的な変化、射精、マスターベーション 女の子——身体的な変化、月経の周期、マスターベーション 再生産：男性と女性の生殖システム。 遺伝と環境の相互作用。 相互の尊敬、信頼、親身になっての世話に基づく関係をつくる。 自尊感情は次のことを意味する。 ・自分について良い感情をもって。 ・誰かを利用し搾取したりしない。 ・だれかの慰み者になったりしない。 ・家族の中でうまく暮らす。 ・何人も他人以外の誰かにより劣っているなどと感じさせられることはできない、ということを理解する。 セックスに伴うリスクを理解する。例えば、計画的でない妊娠、エイズを含む性感染症、情緒的問題、親と社会の価値観との葛藤などがある。 男の子と女の子の関係を理解する。例えば、レディネス (精神的・身体的に準備できている段階) デートする (キスをする、ペッチェングをする、感情を分かち合う)、ステディになる—不都合な点と都合の良い点、責任。 避妊の原理と家族計画の利点。 結婚前の慎みの良いところ。セックスをしなくても愛情を表現し、受け入れることができる方法。 ちょうどそれを生じさせてしまうと不都合な点。

	<p>11. マスターベーションについての議論。 12. 早すぎる年齢で、性的行為に向かわせるピア・プレッシャーとメディア・プレッシャー。</p>
<p>10-12学年 (シニア・ ハイスク ルール)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 人々は、本当に愛していることをどのように知るのか？ 成熟した愛の経験と未成熟な愛の経験を区別する。信頼、コミュニケーション、嫉妬、所有欲、ゲーム・プレイ、特権について議論する。 2. 10代で妊娠したカップルの中には、妊娠の責任をとって結婚するものもいるが、10代で妊娠した女の子の約85%は、妊娠させた男の子に、結局は捨てられている。また、10代で妊娠したものは、学校を退学したり、将来の機会を制限されるに至っている。 3. 「もしあなたが私を愛しているなら、私とセックスするだろう」というアプローチは、ほんの一つの道にすぎないことを理解する。セックスは、決して愛をはかるものではない。(男の子は、時々セックスするために愛情を利用し、女の子はしばしば愛情を得るためにセックスを利用する。) 4. エイズを含めた性感染症についての詳しい説明。 5. 避妊とコンドームの利用について、再度詳しく検討する。 6. 子どもの世話をする能力を含めて、親であるということが意味すること。 7. 性教育の領域における「要求できる」親になるという概念を含めた子育ての基本的な原理 8. 両性間の平等のための基本的なサポート。 <ul style="list-style-type: none"> ・性の二重規範、つまりセクシズムに反対する。 ・性的行為、女性運動、性役割、セクシャル・ステレオタイプ、セックスとメディアにおける動向 ・権利として、有無を言わせない訓練をする。私には権利がある、「ノー」と言って、罪の意識をもつことなく、男らしくないなどと言われることなく、デートを断わる権利がある。また、誰か他の人にあてつけて自分を誇張するためにではなく、「はい」と言う権利がある。 9. 人間関係を豊かにする価値を理解することに基づいた意志決定。 10. アメリカの家族が直面している社会的問題を理解する。 11. 他の人々のために考慮する必要性を認識する。 12. 結婚前の経験は、結婚が成功するか、失敗するかに影響するであろう。 13. 個人の一つの健康の側面として存在するセクシュアリティのより広い役割について理解する。つまり、セックスとセクシュアリティの区別を理解する。 14. セックスを捉える方向性。他者を愛し、世話をすることは、セックスアピールより重要である。 15. セックスに関連した社会的で感情的な問題を理解する。 セックスの衝動と社会や親、宗教上の価値観の間の葛藤・神経症的な性的行為・乱交・近親相姦・売春・レイプ、つまり性的虐待やセクシャル・ハラスメント・不倫 16. 公平に、考えられるあらゆる局面から、中絶のような論争点になっている課題について議論する。 17. 異なるライフスタイルやセックス・スタイルをもつ人々を、例えばシングルの人々やホモセクシュアル、宗教的な独身主義者などを理解する際には好意的で公正であること。 18. 問題に対して援助を得るためのコミュニティにある資源。 19. 親密さと信頼、友達と恋人、貞節。性的な魅力は、愛と同じではない。 20. 「男の子は一旦始めると、もはや止まることはできない」という神話を突き崩す。(男性が性器が痛いと言っても、女性は妊娠や性感染症、感情的に侮辱される危険を犯すべきではない。マスターベーションは、「苦痛」を和らげることができる。) 21. 危険を犯すことと対照的である禁欲の利点。 22. 次のようなダブルメッセージについて、(賛成、反対を)議論する。もし、あなたがとにかくセックスをするつもりなら、コンドームに加えて、避妊薬を使う。 23. ポップ・カルチャー、ピア・プレッシャー、広告、メディアの行為への影響。 24. マリファナなどの薬物乱用が性的行為に及ぼす影響。 25. 関係を試す良い方法は、性交をすることではない。

Sol Gordon, A suggested Curriculum for the Human Development & Sexuality and Interpersonal Relation units of the National Council on Family Relations' Curriculum Guidelines, pp.1-4 (Dawn C. Cassidy ed., *Family Life Education Curriculum Guidelines*, The National Council on Family Relations, 1993) より筆者作成。

どもたちがまずそれへの対処を学ぶとともに、そのような問題を人間関係のとらえ方の問題として展開し、考えさせていく姿勢が見られる点である。

例えば、性的虐待問題への対処は、K-3学年の15や、4-6学年の12に記されているが、ボディ・ポリティックスの問題は、その後7-9学年の5に示されているように、関係性の問題として本質的に検討されていくと考えられる。7学年以降では、愛とセックスの関係としても具体的に検討されていくことになる。なお、表3で用いられている「セックス」は「性交」の意味で用いられていると考えられる。

以上のことから、Gordonの家族生活教育のカリキュラム案は、子どもたちの生活の現実やそこに想起する問題に即して学習テーマを設定する、論争課題の検討に子どもたちが参加する、現実や言説を批判的に検討するなどの視点を持ち込むことにより、「愛と性」の関係を具体的に検討し議論する、性的虐待や薬物乱用、売春などの社会問題について議論する、関係性において生じる暴力に対処するスキルを訓練する等とともに、個人の暮らし方の多様性、他者性の理解、偏見や差別の問題を位置づけることになっているといえよう。そこでの学びは、近代の言説をどこまで批評できるかという限界を有しつつも、子どもたちが個人的な問題に取り組みながら、問題の対処に留まることなく、自己と他者、世界の関係を編み直していく可能性もまた秘めているといえないだろうか。

アメリカ合州国では、1970年代以降、従来の教科枠にとられないコース設定の試みとして、ここで検討してきたような主題群がカリキュラムに持ち込まれてきたが、それらは学校のコミュニティ・スクール化、公民権運動やフェミニズム運動、発展途上国からの移民労働者の増加を背景事情とする文化複数主義の教育理念のインパクトなどを背景としていた。それゆえ、社会的諸主体の分化に対応した学習主体の分化-統合の問題と関わって「対立点のあることから」に関する学習として持ち込まれ、「分化した学習主体の析出と他者性の理解」が内容革新の焦点とされてきたことが指摘されている¹³⁾。

冒頭で述べたように、我が国でも愛と性のテーマや虐待問題などに取り組みされているが、上述の点に注目するならば、子どもの現実や直面する問題を取り上げるといっただけではなく、学習者が学びのプロセスを通じて「平等な関係」を実現するような形で、主題群を教室のシナリオに組み入れること、そのプロセスの検討がさらなる課題となる¹⁴⁾。今後の検討課題としたい。

註

- 1) 中西新太郎『情報消費型社会と知の構造』旬報社、1998。
- 2) 同上書、pp.238-251。
- 3) 拙稿「ジェンダーと総合学習」久田俊彦編『共同でつくる総合学習の理論』フォーラム・A、1999、pp.134-163。
- 4) Dawn C. Cassidy (ed.). *Family Life Education Curriculum Guidelines*, The National Council on Family Relations, 1993。
- 5) Sol Gordon, A suggested Curriculum for the Human Development & Sexuality and Interpersonal Relation units of the National Council on Family Relations' Curriculum Guidelines, pp.1-4, *ibid.*
- 6) NCFRの組織については、鈴木敏子「(3)アメリカにおけるNCFRにおける家族生活教育の体系に関する一考察」(日本家政学会家族関係学部会『家族関係学』No.10, 1991, pp.44-56)に詳しい。
- 7) G. William Sheek, *A Nation for Families*, AHEA, 1984。
- 8) 1984年に発表された枠組みについては、前掲論文「(3)アメリカにおけるNCFRにおける家族生活教育の体系に関する一考察」を参照されたい。
- 9) 枠組みの位置づけや検討された経過については、以下の論文において若干の考察を試みている。山田由佳、山田綾「米国ハイスクールにおける家族関係コース(II)―1994年の調査報告にみられる実施状況と課題―」愛知教育大学家政学教室研究紀要第26号、1995、pp.109-122。
- 10) Richard K. Kerckhoff, *Family Life Education, Handbook of Marriage and Family*, Rand McNally Co., 1964。並びに、Carol A. Darling, *Family Life Education, Handbook of Marriage and The Family*, NY Penum Press, 1986, p.815。
- 11) この点については、前掲論文「米国ハイスクールにおける家族関係コース(II)」において若干の検討を行っている。また、1960年代の「概念アプローチ」の取り組みについては、拙稿「『概念アプローチ』による家庭科カリキュラム構成(第1報)(第2報)」(日本家庭科教育学会誌第27巻1号、1984年、pp.1-13)を参照されたい。
- 12) Coby Bunch Simerly, Kay F. King, Mark Packard, High Schools Family Relation Courses Taught in the United States: Implications for the 1990s, *Journal of Vocational Home Economics Education*, Vol.12, No.1, 1994, pp.58-69。並びに、前掲論文「米国ハイスクールにおける家族関係コース(II)」pp.114-115。
- 13) 前掲書『情報消費型社会と知の構造』pp.229-232。
- 14) 山田綾・高橋英児「第9章 教科再編の視点と総合学習の課題」岩垣・深澤広明編『教職専門叢書③教育方法の基礎と展開』コレール社、1999、pp.146-149。

付記 本研究は、1997-1999年度科学研究費補助金(基盤研究(C))の助成を受けて行ったものである。

(平成11年9月8日受理)